

1935年 東京巨人 東北遠征(鶴岡)サインボール

野球殿堂博物館では昨年11月、山形県鶴岡市在住の工藤明氏から、「1935年 東京巨人 東北遠征サインボール」や当時の写真をご寄贈いただきました。

1934年秋の日米野球で大リーグ選抜チームと対戦した全日本チームを中心に、12月26日に大日本東京野球倶楽部（後の読売ジャイアンツ）が誕生しました。

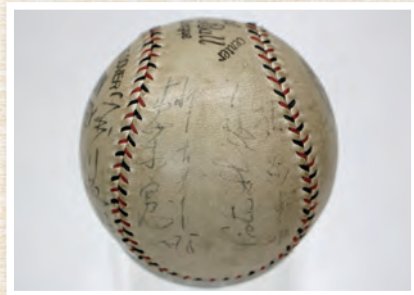
35年の段階では、国内に対戦するプロ野球チームがまだなく、2月から7月まで渡米遠征を実施。帰国後、東京巨人は9月6日から北海道・東北遠征を行い、各地でクラブチーム等との試合や紅白戦を行いました。青森、函館、札幌、旭川と転戦し、12日には札幌に戻り紅白戦を実施、その晩に札幌を出発し、秋田を経由して13日22:30に山形県鶴岡市に到着しました。「巨人軍20年史」によると、深夜で雨中にもかかわらず、花火をあげて市民が歓迎したとのこと。

翌14日14時より鶴岡工業学校の球場で紅白戦を開催、地元のアマチュア選手も2名加わり試合が開催されました。白組は畑福俊英投手が先発し完投、赤組はスタルヒン投手（1960年殿堂入り）が先発、ライトで先発した沢村栄治投手（1959年殿堂入り）がリリーフし、非常に豪華な継投が見られました。試合は4-3で白組が勝利、ウイニングボールを捕球したのが、地元から参加し途中からライトを守った工藤武氏でした。この工藤氏が記念に選手のサインを集め、大切に保管していたボールを、今回そのご子息、明氏よりご寄贈いただきました。当日継投を見せた沢村投手、スタルヒン投手の名前が二つ並んで書かれています。

ちなみに、チームは試合終了後、当日の夜行列車で帰途につき、翌15日朝6時に上野駅に到着。日本橋の宿舎で一休みした後、横浜へ向かい、14時より横浜公園球

場にて、同年の都市対抗準優勝で若林忠志投手（後のタイガース投手）のいた川崎コロンビアと対戦しています（6-0で巨人が勝利）。

128日間で109試合、移動距離2万キロ超という過酷な渡米遠征を経験したチームだからか、国内の遠征も非常にタイトだったようです。



左から青柴憲一、沢村栄治、スタルヒン、飯泉マネージャーのサインが並ぶ

公益財団法人 野球殿堂博物館
学芸員 関口貴広